

「組織記号論」と「批判的記号論」

—最近における記号論拡大の2つの方向—

大橋 昭一

I. はじめに—本稿の課題

記号論 (semiotics) が世界的に広まったのは、1960年代以降であるが、近年では、組織をこの観点からとらえ直す「組織記号論 (organizational semiotics)」が進展しつつある一方、現在の資本主義体制に対し批判的立場をとる方向、すなわち一般に「批判的記号論 (critical semiotics)」といわれるものが展開されている。本稿は記号論の近年の動向として、この2つの方向について大要を考察することを課題とする。

ちなみに、これまでの記号論に立脚した研究には、マルクスの『資本論』における「商品」概念を対象にしたものもある (例えば文献K1, K2; 詳しくはΩ3)。こうした記号論立脚の研究のなかには、少なくとも社会科学系学問ではすべての分野が記号論を基礎に展開されるべきとする主張すらあり、「記号論帝国主義 (imperialistic science)」的傾向とよばれているが⁵ (B5, p.107; C3, p.1), 現時点ではどの社会科学系分野でも記号論的研究がありうるという状況になっている。

例えば最近では、「記号資本主義 (semicapitalism)」や「記号論的資本 (semiotic capital)」という言葉まで生まれている (G4, p.91ff.; cf. B4; G3)。また管理 (management) についても、アルゼンチン・ブエノスアイレス大学のサストレ (Sastre, R.) のように、2016年に、パースの記号理論 (詳しくは後述) とビジネス/マネジメントとを結び付けることは、まだ普遍的ではないが、その有効性ははっきりしていると述べているものもある (S1, p.202)。

ところで記号論は、全体として新しい分野であることもあって、新進の記号論者、リーウヴェン (van Leeuwen) は「記号論の著では、『記号論とは何か』からスタートするものが多い」と書いている (L5, p.1)。本稿もこれに従い、本稿で前提とする記号 (sign) とは何か、および、これまでの通常のあるいは定例的な記号論 (以下では「通常記号論」という) にはどのようなものがあるかから論述する。なお参考文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。また、本稿の内容は一部において別拙稿 (Ω9, 10) と重複するところがある。

Ⅱ. 通常の記号論の概要

(1) 記号とは何か

まず、ここでいう記号とは何か。交通信号を例にとると、赤信号のとき、信号ルールを知っている人は、これを「停止信号」という意味 (meaning) のものとして理解し、停止行動をする。この「赤信号=停止信号」という意味で理解するのが記号である。これを単に「赤色のもの」と知覚するのは、情報である。情報は事実そのものをいうが、記号は、情報をもつ意味をいう。

記号は、実体でみると、上記のような信号以外に、言葉、イラスト、音、匂い、動作、物の形、イメージ、風味など多くのものがあるが、その意味は人間によって決められる。有名な記号論入門書の著者、チャンドラー (Chandler, D.) は、「これらのものは、本来は、(記号としての) 意味を持たない。これらのものに人間が(記号としての) 意味を持たせるときにはじめて記号になる」と定義している (C1, p.1: カッコ内は、他の断わりがない限り、本稿筆者のもの、以下同様)。

この場合注目されるべきことは、上記の交通信号の場合にはつきりみられるように、人間は記号に基づき行動することである。言葉やイラスト、音、ジェスチャーなどにしても、それを見たり聞いたりした人は、それにはこうした意味があると認識し、所要の行動をとる。このことをヘルシンキ大学のピエタリネン (Pietarinen, A.) は、「記号の意味とは、一定の状況のもとで一定の方法で示される行為習慣 (habit of acting) である」と規定している (P, p.4)。人間は、単なる情報ではなく、その意味、すなわち記号に基づいて行動する。

では、人間はいかにしてこのように記号について意味があるものとして知覚できるようになるのか。それは、人間が、家族をはじめ、種々な人間社会のなかで生まれ、育つからである。人間は、こうした共同生活のなかで、単に意思の伝達手段として言葉を知るだけでなく、言葉や出来事の背後にあるものの意味や、見たり聞いたりすることの意味を知るように育ち、言葉や出来事の意味を知るようになる。このような意味では記号は、本来、社会的なものである。

さらに例えば、発煙状態だけを見て、火事があることを知るようになる。これは発煙状態が火事を意味する記号として機能しているからである。これからもわかるように、記号には、ある事柄の兆し (アイコン (icon): 類像) のものや、一部 (インデックス (index): 指標) だけのもの、あるいは象徴的なもの (シンボル) もある。言葉にしても、例えば「寒い」という言葉 (記号) を聞いて、窓を閉めるような行為を導くこともある。

記号論は、記号のもつこうした意味、働きを研究しようとするものである。その基礎を作ったのは、世界的に一般的な見方によると、スイスのソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913)、アメリカのパーズ (Charles Sanders Peirce, 1939-1914)、および、ロシア生まれでフランス育ちのグレマス (Algirdas Julien Greimas, 1917-1992) の3人である。ここで「通常の記号論」というものは、この3者の説をいうものである。以下では、まず、これらの「通常の記号論」の

大要を管見する(以下の3説については主として文献Hによる。さらに詳しくはΩ3-7, 9を参照されたい)。

(2) ソシユール説

まずソシユールは、人間の記号現象の問題は、記号そのもの(上記の例では赤信号)と、その記号の意味するもの(上記の例では停止信号という意味)との関係に尽きるとして、前者の記号そのものを「シグニファイアー(signifier:ただし日本でもフランス語でsignifiant(シニフィアン)とよばれることがある)」と名づけ、後者の記号が意味するものを「シグニファイド(signified:フランス語ではsignifié(シニフィエ)とよばれる)」と名づけて、両者の関係について、言語を中心に究明を行った。ソシユールの説は通常、記号論の2要素説といわれる。

この場合、上記の「赤信号=停止信号」の例でみると、赤信号が停止信号とされているのは全く人為的なものであって、赤色の信号すなわちシグニファイアーと、停止を命じるその意味、すなわちシグニファイドとの関係はもともと恣意的なもの(arbitrary)であると、ソシユールは強調している。

さらに、アメリカの法学者、ビーベ(Beebe, B.)によると(B2, p.639)、ソシユール説では、記号のもつ意味(記号論的意味)の変化・発展は2重の仕方で起きる。通時的变化と共時的变化とである。前者は、当該記号のシグニファイアーとシグニファイドとの関係という当該記号自体の内部(intrasign)において、時系列的な推移・発展のなかで起きるものである。当該記号における「シグニフィケーション(signification)の変化」とよばれる。

後者は、ある一時点において他の記号との相互比較関係(intersign)に基づき起きるものである。他の記号にはないものを示すものという意味で、当該記号における「記号論的価値(value)の変化」とよばれる。記号論の主たる課題はこの2つの変化を解明するところにあるとされる。

(3) パース説

パースは、ソシユールとほぼ同じ時期に所説を発展させた。しかしパースとソシユールは、アメリカとスイスにあって、お互いの研究を全く知らない状況で、理論形成を図ったものであったから、同じような事柄を示す用語が別のものとなっている。またパースは、ソシユールと異なって、記号現象は3要素から成るものと主張した。

すなわち、記号そのもの(ソシユール説でシグニファイアーといわれているもの)は「レプレゼンテイメン(representamen)」, 記号の受け手で表象されるもの(ソシユール説でシグニファイドといわれているもの)は「インタープレタント(interpretant)」と名づけている。それ以外に、その記号が示す実在のものがあることを記号現象の不可分の1要素とし、それを「オブジェクト(object)」とよぶものとしている。

ただしパースは、これらの記号現象の3要素には順位(hierarchy)があるとし、レプレゼンテイメンが第1次性(firstness)、オブジェクトが第2次性(secondness)、インタープレタントが

第3次性 (thirdness) にあるとしている (H, pp.192-198)。パースのこの3要素説について、その後イギリスの記号論者、ミンガース (Mingers, J.) / ウィルコックス (Willcocks, L.) は、2014年の論文 (文献M3) で、図1のような三角形で表わされるとしている (以下原著の図の用語は原語で示すことがある)。この図で注目されることは、インタープレタントとオブジェクトとの関係が推定的なもの (imputed) とされ、図では点線で示されるとされていることである。また、パース自身はこうした三角形図示はしていない (C2, p.13)。

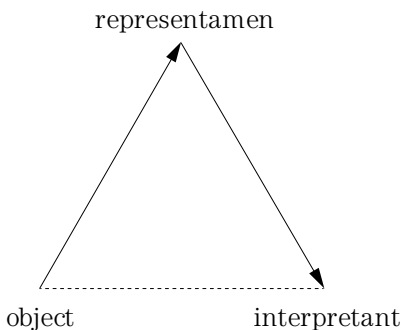


図1：ミンガース／ウィルコックスによる
パース記号論三角形 (出所：M3, p.13)

これは次のことを、すなわち、記号の受け手が当該記号により表象するものは、その実在のものとの関係が確定的ではないことを意味する。記号の最終的効果は、いうまでもなく、受け手における表象のいかんにより決まるが、それは、実在のものとは確定的な関係にはないというのである。

これは理論史的には、ソシュールが指摘したところの、シグニファイアーとシグニファイドの間にはもともと恣意的な関係しかないという考えに照応したものである。この点に関連しミンガース／ウィルコックスは、「情報は客観的なもので、真実なもの (true) であるが、記号が示す意味は主観的なもので、時には虚偽のもの (false) もある」と書いている (M3, p.11)。

(4) グレマス説をめぐって—2要素説と3要素説との関連を中心に

グレマス説は、社会の記号的関係の基盤となっているものは2つの対照的要素関係 (two pairs of opposite elements), すなわち「ホモロゲーション (homologation)」にあると考え、それを根本的前提とするところに特色がある。それは一般的にいえば図2のようなものである。すなわち、ある事柄 (例えば事柄 [A]) の記号的認知は、それと対抗 (contrariety) の関係にあるもの (例えば [B]), それに含意される (implication) 関係にあるもの (この例では [-B]), および、それと矛盾 (contradictory) の関係にあるもの (この例では [-A]) の4者を立脚点にする。通常、「グレマスの四角形説」といわれる。

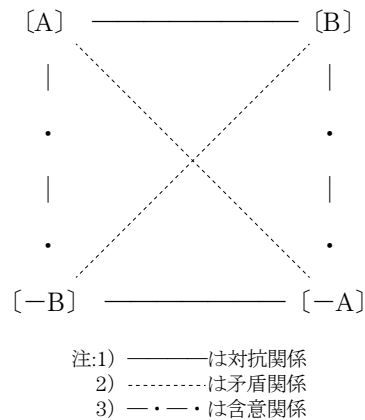


図2：グレマスの記号論四角形（出所：M2, p.13による）

ここで注目されることはグレマスの四角形説について、チャンドラーが四角形上辺の[A] [B]は「プレゼンス (presence)」を代表し、下辺の[-B] [-A]とは「アブセンス (absence)」を代表するとし、その例としてマリオン (Marion, G.)が衣装について次のように例示していることを紹介していることである (cited in C2, p. 14)。すなわち、[A]を「見られたいもの (wanting to be seen)」とすると、[B]は「見られることを好まないもの (not wanting to be seen)」, [-A]は「見られないことを望むもの (wanting not to be seen)」, [-B]は「見られないことを望まないもの (not wanting not to be seen)」となる。

しかしグレマスの四角形説は、現実における2極対立的な矛盾を図示的に解明するに適している。例えば今日の社会は、根本的には「資本対労働、(一般商品の)売り手対買い手」という2つの2極対立関係として表示することができる。これを「グレマスの四角形説」で示すと図3のようになる。

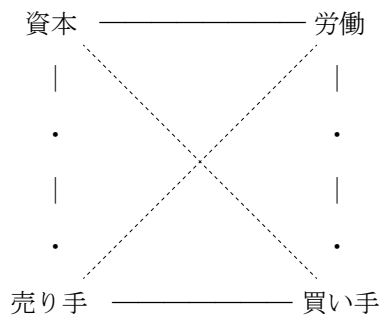


図3：資本主義体制の四角形（本稿筆者作成）

ただしグレマス説は、一部記号論者では無視されていることがある。例えば、記号論を駆使

してアメリカ商標法の解明を行っている前記のビーベ (文献B2) では、グレマス説は全く無視されている。また、ツーリズムの記号論的分析を含んで名高いマキャネル (MacCannell, D.) の著 *"The Tourist : A New Theory of the Leisure Class"* (文献M1) でも、出典記号理論としてソシュール説とパース説だけが挙げられ、グレマス説は全く無視されている。

一方、グレマス説に対しては、アメリカの著名なマルクス主義研究者、ジェームソン (Jameson, F.) のように、「これは、思想それ自体を概念構成したもの」と高く評しているものもあるし (cited in F1, p.2), アメリカのマーケティング論者のように、企業のマーケティング活動について「グレマスの四角形説」を使って分析しているものもある (詳しくはΩ4)。さらに「アクターネットワーク理論」の総帥というべきラトゥール (Latour, B.) は、「アクターネットワーク理論は、半分はガーフィンケル (Garfinkel, H.) の所論、半分はグレマスの所論に負うものである」と高く評価している (L1, p.54)。

さらに、グレマス説の本質的意義や有用性は、まだ完全には論じ尽くされていないという意見もある。例えば近年でもアメリカ・オークランド大学のコルソ (Corso, J. J.) は、この四角形説に対して、著名な論者たちが種々な目的で批判を展開しているが、しかし「プラグマティックな用具的説明を超えて、この四角形説が真に目的するところを十分に論証したものは、まだほとんどない」と論じている (C4, p.74)。

グレマス説は記号現象を四角形的形態で示すものであるが、その基礎をなすものは2極対立性であって、根本的には2要素説である。この場合グレマス説を否定する論者たちがその代わりとするものは、パース説であって、それは3要素説である。従ってグレマス説とパース説との対抗は、2要素説と3要素説との対抗という側面があるが、この対抗は、すでにソシュール説とパース説との間にあったものである。以下ここでは、この点に焦点をおいて、現時点における一般的状況について一言しておきたい。

この点について結論的にいうと、現在の多くの記号論説ではソシュール説とパース説とのいわば一体化が進んでおり、対抗関係にあるとは考えられていない。例えば前記で一言したマキャネル説でみると、根拠とすべき記号理論にはソシュール説とパース説とがあると明示されたうえで、記号現象は (以下記号論用語は原語のまま示す場合がある)、signifier, signified, referentの3要素があるとされている。前2者はソシュール説のままであり、最後のreferentは、パース説でobjectとされているものを、(その間に発表された) オクデン (Ogden, C. K.) / リチャーズ (Richards, I. A.) (文献O) の説に依拠し、referentに変更しているものである (M1, p.118)。

これと似た提議は、前記のビーベの所説にもみられる。そこではパース説が典拠記号理論とされているが、その際記号論3要素は、用語上では、あくまでも次のようにカッコ付きで表示されるものとされている。すなわち、"representamen (signifier)", "object (referent)", "interpretant (signified)" である (B2, p.637)。

この場合 "object (referent)" という表現については、厳密にいうと、objectとreferentと

では考え方において原理的な違いがある。すなわちobjectは、実在物が客観的に(人間の意識・認識とは別に)存在するという考えにたつが、これをreferentという場合には、記号と同レベルのもの、すなわちsignifierやsignifiedと同次元のものであって、signifierの単なる参照先(refer for)という位置づけになる。しかしパース説でも結局、objectは記号の照会先という意味で使用されているといわれるので(G6, p.5)、ここでは“object (referent)”という表現も可とされる。ちなみにマキヤネルは、referentを「今1つ(第3)の記号(another sign)」とよんでいる。

故に現在、世界的に一般通例的に妥当する記号理論は、後述のジェノスコ(Genosko, G.)の見解を斟酌して考えても(G4, p.168)、パース記号論3要素説であり、その場合3要素として挙げられるものはsignifier, signified, referent (or object)という名称のものであると考えられる。

この場合、2要素説と3要素説との関連について、本稿筆者としては、それは問題の状況・局面のいかんにより有効性・妥当性が異なるだけのものと考え。例えば幾何学では1つの線の確定には2点で足りるが、1つの面の確定には3点が必要である。これと基本的には同様と理解すればいいものである。次に、これらの通常的記号理論のうえにたつて、特に組織について新しいとらえ方を提示している「組織記号論」の試みについて管見する(「組織記号論」についてさらに詳しくはΩ10を見られたい)。

Ⅲ. 組織記号論の提起

(1) 組織記号論の生成

組織記号論は、2000年代になってから刮目すべき世界的な発展・展開をみせているものだが、そのきっかけになったのは、「情報処理国際連合(International Federation for Information Processing: IFIP)」において組織記号論を中心テーマにした第1回ワーキング部会(IFIP TC8/WG8.1/Working Conference on Organizational Semiotics)が、2001年にカナダのモントリオールとケベックで開催されたことに始まる(文献Iによる)。

この第1回ワーキング部会を主宰したのは、オランダ・トウェンテ大学/イギリス・スタッフォードシア大学のスタムパー(Ronald K. Stamper)で、このワーキング部会の報告書において序文(文献S2:以下では「2001年報告書序文」という)を書いているのもスタムパーである。かれは、この方向における問題解明の世界的な先導者で最も有力な一人とみられる。「2001年報告書序文」にはかれの考える組織記号論の原理的基礎をなす部分が要約的に提示されている。本節ではこの考察を中心に行い、その原理的特徴を明らかにすることを課題とする。

結論を先に示せば、スタムパーらの組織記号論は、組織という協働の場において決定的役割をもつのは人間、すなわち人的アクターであり、人的アクターが受け取った記号をどのように理解し解釈し、定義するかが決定的要因になるとするものである。故に協働の場では、人間集

団の社会的要因(社会的世界(social world))が最上位の地位を占めるとする。それはいわば人的記号論というべきものであって、物的要素は全く従たる地位にあるものとされる。

これは実は、記号理論のうえでいえば、前記のラトウールやイギリスのロー(Law, J.)などを中心に展開されているアクターネットワーク理論には反対の、対極的立場を主張するものである(アクターネットワーク理論について詳しくはΩ2参照)。ラトウールやローらのアクターネットワーク理論では、例えば1台の走行している自動車を1つのアクターネットワークと考え、人的アクターと物的アクターとの一体的協働という視点の重要性を主張する。従って「アクターネットワーク理論は物的記号論(material semiotics)の1分野であり、かつ、社会と自然におけるすべての事柄について、それらが置かれている諸関係の網(webs of relations)を究明するものである」と規定される(L2, p.2)。ここには、少なくとも“物的記号論”という言葉が登場している。

スタムパーの「2001年報告書序文」(文献S2)によると、それまでに行われていたIFIPの国際的ミーティング等でテーマとなってきたのは、主として「コンピューター記号論(computer semiotics:1996年, 1997年)」であった。それが「組織記号論」として定着したのはおよそ1999年(アルメロでのミーティング)以来である。

このことからみても、組織記号論はもともと「コンピューター記号論」と言われてきたものであり、それが2000年ごろから組織記号論といわれるものになったと解される。ちなみに、スタムパーのこの「2001年報告書序文」をみると、その序文タイトルは「組織記号論:情報システムの科学の進展(evolution of a science of information systems)」となっていて、組織記号論は、端的には、「情報システムの科学」ということになっている。

そこでまず第一に問題となる点は、「情報システムの科学」が何故記号論でなくてはならないかという点である。この点についてスタムパーは、前記の「2001年報告書序文」では、「何よりも第一にこの研究グループでは、記号は操作上間違いがなく、かつ根源的なものという考え方にたって、情報システムの科学を作り上げることについて合意があったものである」(S2, p.xvi)と述べている。

その際スタムパーは、「記号というものの概念上の強さは次のところに、すなわち、記号であるが故に解明されるものがあり、かつ、組織のなかで物事をなさしめるにあたって記号がどのように使用されているかについて、実例的に示すことができるところにある」(S2, p.xvi)とし、「物事をなさしめること」、すなわち管理上でも有用と論じている。

さらにこの点をスタムパーの別の論文(文献S3)でみると、「(いわゆる)情報(information)は曖昧でとらえどころのない(vague and elusive)概念である。これに対して工学技術的(technological)概念は精密にとらえることが容易なものである。従って両者には原理的に乖離があるが、記号論は、記号論の概念を用いてこの乖離を乗り越えようとするものである。というのは記号は、情報概念にみられる不鮮明さがなく、(工学技術同様に)精密に(rigorous)作業することの出発点になりうるからである」(S3, p.ix-1)。

それ故に「(いわゆる)情報は、ある1つの科学の土台である基盤をなすのには不適當なものである。これに対し記号論で提示されている記号こそが、科学の前提になる(真の)情報・意味(meaning)・コミュニケーションなどについて頼りになる定義をする基盤となる」(S3, pix-2)ということになる。

さらに2000年のスタムパーらの論文をみると、「情報システムは、これをコンピューター土台的なもの(computer-based)と考えるのは賢明ではない。それよりも1つの(人間により構成されている)組織と考えるべきものである」とし、そして組織は、要するに記号で動いているものであると規定されている(S4, pp.2-4)。

では、スタムパーの拠り所とする記号理論はどのようなものか。基本的にはそれは、既述のアメリカの記号論者パースにより提示されているものであるが、ただしそれには一部において修正が必要なものとされている。パースの記号理論は、既述のように、記号現象を次の3者、すなわち、通常記号といわれるものをいう「レプレゼンテイメン」、それが示す实在の対象である「オブジェクト」、当該記号の受け手において表象されるものである「インタープレタント」から成るとするものである。

これに対しスタムパーは、組織記号論では、これら3要素のなかでインタープレタントについて、それは“定義すべきもの(definiendum)”について“定義する(defien)こと”をいうものであり、かつ組織では、定義して実行すること、つまり“働くための定義(definition to work)”を含んだものであるから、これは(インタープレタントではなく)「デフィニション(definition: 定義すること)」とよぶことを必要とする。そしてこれら組織記号論の3要素は、次のように規定され、図4のような三角形で示されるものとする(S2, p.xviii)。

- ①レプレゼンテイメン:いわゆる記号そのものであるが、単なる記号そのものとは区別して「記号担い手(sign-vehicle)」といわれることもある。スタムパー説ではこれは、操作的に提示可能な安定的なパターンをなすものと措定されている。
- ②デフィニション:記号の受け手において象徴されるものであるが、定義されるべきものについて、受け手において定義したものと規定される。その際当該オブジェクトの構造に関連して定義が行われるもの(structure of objects in the defiens)とされる。
- ③オブジェクト:当該記号において指示されている対象をいう。それは操作的に提示されうるものであり、複雑ではあるが安定的な構造のものと措定される。

この場合スタムパーは、これら3要素のなかでも、組織記号論では体系上デフィニションが重要視されるべきものとしている。この点は、例えば組織記号論三角形においてデフィニションが頂点にあるものとされているところにはっきり表れているが、デフィニションは既述のように組織では「働くためのデフィニション」と措定され、組織では行動の起点をなすものと規定されている。故にデフィニションでは、それが現実の定義されるべきもの、すなわちオブジェクトと、リンクしたものであることが肝要と規定されている。

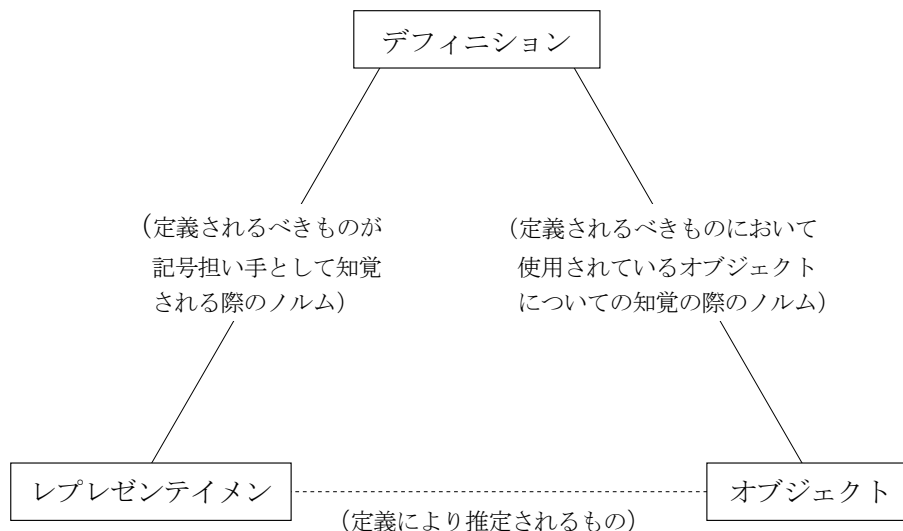


図4：スタムパーによる組織記号論三角形 (出所S2, p.xviii)

(2) 組織記号論三角形の特色

以上のような組織記号論三角形の考え方は、その元になっているパースの所論とくらべると、どのような特徴があるであろうか。

この点でまずに注意されるべきことは、既述のようにパース自身では、このような三角形図示は一切なされていないことである。ところが記号論の分野では種々な論者によりいわゆる記号論三角形の図示がなされており、前述のようにそのなかにはパース説にたつ記号論三角形というものもある。しかし正確にはそれらは、当該作図論者により自らの記号理論に基づき作成されたもので、パース自身により作図されたものではない。

ただしパース自身の記号理論で特徴的なことは、前記で紹介したようにかれの記号論3要素において順位があるとされていることである。すなわち記号論3要素では、レプレゼンテイメン＝第1次性、オブジェクト＝第2次性、インタープレタント＝第3次性である。

このことは、換言すれば、パース説では記号関係は、ごく簡単には次のように、すなわち、記号そのものであるレプレゼンテイメンがまずあって、次にその実在物であるオブジェクトがあり、最後に記号の受け手におけるインタープレタントがあると解されているものと理解できる。そこでパース説は、ミンガース／ウィルコックスによると(既述の)図1のように表わされるものとされている。その図では、パースのいう第1次性が三角形の頂点に置かれるようになっている。

ただしミンガース／ウィルコックスの説では、内容的にもパース説とは異なったところがある。例えばパース説では“アイコン (icon: 類像)”, “インデックス (index: 指標)” および “シンボル (symbol)” は、オブジェクトすなわち実在対象のあり方とされているが、ミンガース／ウ

イルコックスではレプレゼンテイメンすなわち記号のあり方とされている (M3, p.13)。

このことは別として、パース説を図示したというミンガース／ウィルコックスのパース記号論三角形と、スタムパー説の組織記号論三角形とを対比してみると、第1に強く目につくことは、パース説で第3次性とされているインタープレタントが、スタムパー説ではデフィニションとして三角形の頂点に立つものとされていることである。この地位は、ミンガース／ウィルコックスによるパース記号論三角形では、前述のように第1次性のレプレゼンテイメンとされているものである。

故にこのことから次のような結論的命題が導出される。すなわち、パース＝ミンガース／ウィルコックスの記号論説では記号そのもの(レプレゼンテイメン)のあり方(例えば記号の作られ方等)を解明することが主題となっているのに対して、スタムパーの組織記号論説で解明の主題とされているものは、インタープレタントにあたるデフィニションであって、記号の解釈・受け取られ方・使用のされ方こそが解明の主題とされていることである。ここに記号論一般にはない、スタムパーら組織記号論の原理的特色がある。つまり組織記号論では、記号そのものがどのように作られるかではなく、作られた記号(例えば職務規定における定めや上司の命令・指図など)が、組織のなかで個々の組織構成員によってどのような意味のものとして受け止められ、定義されて実行されるかが第1の解明課題となるのである。

それ故、第2に注目されることは、少なくともミンガース／ウィルコックスのパース記号論三角形では、ある意味で当然ながら、(実体上記号現象の出発点である)オブジェクトと、(記号現象の最終結果である)インタープレタントとの関係が推定的なものとされ、図では点線で示されるものとされているのに対し、スタムパーの組織記号論三角形では、そもそもの出発点であるレプレゼンテイメンすなわち記号そのものについて、オブジェクトすなわち実在対象物との関係が推定的なもの、つまり点線で示されるものとして提示されていることである。すなわち、記号そのものが最初において実在と離れているかもしれないと措定されるが故に、記号の受け手においてデフィニションをして、記号の意味を解釈・定義し確定すること、すなわち記号の受け取られ方が最も枢要な課題となることになる。この点はさらに、組織記号論では、デフィニションにおいて、単なる記号の認識ではなく、認識に基づく行動が肝要とされることにより、さらに幅広く、かつ奥深いものとなる。

ここでさらに、第3に注目されるべきことは、スタムパーが組織記号論で対象となる現実(reality)について、それは究極的には、あくまでも社会的構成(social construction)というものであることを力説していることである。ただしスタムパーの「2001年報告書序文」では、次のように述べられるにとどまっている。すなわち「個人的に私は、現実にある一部のものについて客体論(objectivist)的立場をとり、残りについて社会的構成論(social constructivist)の立場をとるものに対し、大きな不快の念を感じてきた」(S2, p.xvii)。

そこでこの点について、当時のスタムパー説について解説的論文を著作しているオランダ・

グローニンゲン大学のガツェンダム (Gazendam, H.) とイギリス・リーディング大学のリユー (Liu, K.) がどのように記述しているかをみると、「スタムパーはかなり徹底した主体主義 (radical subjectivism) という哲学的立場をとっている」のであり、そこでは「現実には常に、社会的過程を通じてなされる人間相互の交渉・作用によって形成され変化してきたことが主張されるものである」と特徴づけている (G1, p.3)。

このうえでスタムパーにより提示されている組織記号論の土台をなす「組織記号論的段階 (もしくはフレームワークあるいはラダー: semiotic framework: semiological ladder)」(S2, p.xxiii; S3, p.ix-2) をみると、下記のようにになっている。これは記号のあり様 (property) を示すもので、段階的には①→⑥の順で高位のものとなり、「社会的なもの」が最高位にあるものである。通常、図5のように示される。

- ①物的なもの (physical): 意味的内容を問わず、物的な点のみが問題となる段階。例えば信号。
- ②経験されるもの (empiric): 流れのなかでとらえることが肝要なもので、継続的反復的データが意味を持つもの。例えば年齢, 身長, エントロピーなど。
- ③統語体的なもの (syntactic): 言語, 論理, 数的モデル等で, 形式的構造が問題となるもの。
- ④意味論的のもの (semantic): 意味 (meanings), 命題 (proportions) 等で, 形式よりも内容が問題となるもの。
- ⑤プラグマティックなもの (pragmatic): 行為の際の意図などで, 実際行為において有効性がわかるもの。
- ⑥社会的世界 (social world): 信念 (belief), コミットメント (commitment), 満足 (satisfaction) あるいは規則や法令 (law) などに示されているもの。

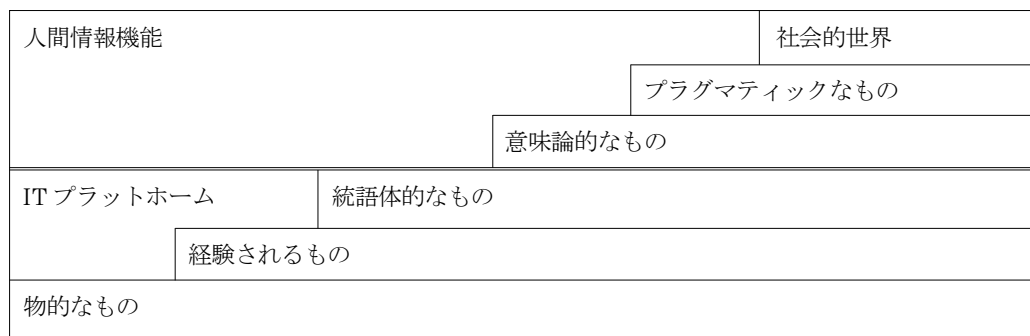


図5: 組織記号論的段階 (出所: S3, p.ix-2; ただしここではF2, p.2による)

この6つの区分は、パースはじめ通常の伝統的記号論では、記号論の分野について統語論・意味論・プラグマティック論に区分されているものに相当する。これがスタムパーでは6分野に拡大され、しかも「社会的世界」が最高位にあるものとされている。ここに、スタムパーらの組織記号論における組織のとらえ方の特色をみることができる (N1, p.44)。

ちなみに、アイルランドのゴールウェイ・メイヨー工科大学のコステロ (Costello, G. J.) は、2016年の論考で、シュナイダー電機会社関連企業における実態調査に基づくと、この「組織記号論的段階」においては、上部の「人間情報機能」と下部の「ITプラットフォーム」との間に、1つの「中二階的な仲介段階 (mediation mezzanine)」があると考えた方がいいと提議している (C5, p.14)。

この点に関連して看過されてならない第4のことは、前記のスタムパーによる組織記号論三角形 (図4) では、頂点のデフィニションが作られる元になるものは、レプレゼンテイメンからの場合も、オブジェクトからの場合も、いずれも「ノルム (norm)」というものであるとされていることである。つまりデフィニションは、記号そのものであるレプレゼンテイメンとの関係でも、その实在対象であるオブジェクトとの関係でも、ノルムとして確定されるものである。これに対しレプレゼンテイメン—オブジェクトの関係は、推定的なものとされている。

この点について、スタムパーの「2001年報告書序文」では特段に言及されているところはなく、いわば自明のように扱われている。そこで先に典拠した2003年のガツェンダム／リユーの解説的論文をみると、スタムパー説では「組織は、人々の行動を規定する文化的小よび法的なノルムという観点でとらえられるものとされている。……組織など共同体ではなされるべき行動についての知識は『共有された知識 (shared knowledge)』として蓄積され、それが社会的ノルム (social norm) として機能するものと措定されている」と書かれている (G1, p.6)。

ところがこの点についてガツェンダム／リユーは、同ページ脚注において、社会的ノルムについてのこうしたスタムパーの理解・概念は、通常一般的に使用されているこの用語の使い方とは異なったものである、とわざわざ断っている。

これは本稿筆者のみるところ、ひとつには、スタムパー説では、ノルム概念の基礎に「アフォーダンス (affordance: 余裕)」の考え方があるところからくる。アフォーダンスは、もともとギブソン (Gibson, J. J.) が提起した概念であるが (文献W), 要するに、この世界で人間が活動し生活してゆくためには、あるいはそれができるためには、物的領域でも社会的領域でもさしあたり変わることがないとして (invariant) 予定できる一定のものの存在することが前提になることをいう。例えば物的領域でいえば太陽や空気の存在などであり、社会的領域では最低限の社会的分業の存在などである。

これが要するにアフォーダンスであるが、スタムパーなどの組織記号論では物的アフォーダンスも、人間にとって、それは結局、人間の知識となつてはじめて有用なものとなるから、人間の知識活動、すなわち社会的なものとして現れるのであって、それは記号のデフィニションにおいていわば根本的前提として、すなわちノルムとして機能するものとして現れるとみるのである。こうした意味ではスタムパーらにおいてノルムといわれているものは、通例的に例えば「規範」といわれるような強い意味のものではなく、当然の常識的な行為前提というべきものと解される。本稿では原語のまま「ノルム」と表記している。

スタムパー自身の論述に基づく組織記号論の序論の大要は以上とする。次に、その補足的なものとして、ガツェンダム／リユー／ジョルナ (Jorna, R. J.) による2004年の論文 (文献G2) をレビューする。これは同年開催の「シェルと空間構造に関する国際会議 (International Association for Shell and Spatial Structures : IASS) の大会におけるラウンドテーブル『異文化交流とグローバル化 (Interculturality and Globalization) についての組織記号論の見解』」における報告論文 (以下では「2004年IASS報告論文」という) である。この論文では何よりも組織記号論には3つのアプローチのあることが提起されている。

(3) 組織記号論の3つのアプローチ

まず、ガツェンダム／ジョルナ／リユーは、組織記号論でいう組織とは、「望ましい行動について共有した知識を有し、そしてこの知識の社会的構成 (social construction) に参加する人々の共同体 (community)」と規定されるとし、こうした組織において変化やダイナミクスを生むためには、次の5者 (課題) が必要であるとする (G2, pp.2-3)。

- ①進化の時代に適した行為 (behavior) のパターンの普及。
- ②記号の交換に基づくコミュニケーションの進展。これにより自己組織的な認識的なシステムと社会的システムにおいて進化的変化が生まれる。
- ③社会的アフォーダンスおよびそれに付着している社会的ノルムについて創造と (必要の場合の) 廃滅 (annihilation)。
- ④行動 (action) の振興。例えばコミュニケーション行動や、情報システムの設計・創造・変化等。
- ⑤人間的認識的システムを次の点で機能させること、④制約された合理性という状況のもとにおける問題解決、⑥学習、⑦コミュニケーション的行動。これらにより知識の創造・変化・転換・移転が生まれる。

これら5つの課題に応えるために、組織記号論では3つのアプローチがある。上記の考え方のうち①②に応えるものが「システム志向的アプローチ (system-oriented)」, ③④に応えるものが「行為志向的アプローチ (behavior-oriented)」, ⑤に応えるものが「知識志向的アプローチ (knowledge-oriented)」である。

第1の「システム志向的アプローチ」は、メディア (例えば、話された言葉、テキスト、文書、コンピューター・インタフェースなど: このカッコは原著のもの) を記号システムとしてとらえ、これらのメディアが人々の話しや解釈においてどのように用いられているかを解明する (G2, pp.3-4)。つまり、コミュニケーションとメディアを究明するものである。このシステム志向的アプローチは、次の4者に分かれる。

- ①「システム記号論 (systemic semiotics)」: システム的な機能的言語、社会的記号論および組織理論からの諸要因を適用することに志向するもの。

- ②「ダイナミック記号論 (dynamic semiotics)」: 働きのなかでなされる人々のコミュニケーションの分析に焦点をおくもので、何がなされているか、何がなされるべきかを示すもの。
- ③「進化的アプローチ (evolutionary approach)」: 組織そのものや仕事上のネットワークを全体として (as a whole) とらえ、ダイナミック性を究明するものであるが、その際戦略に焦点をおくもの。
- ④「システム理論的 (systems-theoretical) アプローチ」: 上記の③と同じ基本趣旨にたつものであるが、その際記号交換を通じて行われる相互活動システムにより生まれる双方向的影響の究明に焦点をおくもの。

第2の「行為志向的アプローチ」は次の根本原理にたつ。すなわち、知識はすべて、その所有者であるアクターがあるものであるから、すべての知識はアクターの行動を伴ったものである。故にこの世におけるすべての事柄はアクターの考え・判断に依存するものであって、この世界は客体的な (objective) ものではなく、主体的なものである、と考えるものである。これは現在 (2004年)、組織記号論のなかで最も主流的な考え方である。次の2者に大別される (G2, pp.4-7)。

- ①「情報フィールドを土台とした (information field based) 組織記号論」: これはスタムパー説の中核を成すものである。まず情報フィールドとは、前記で一言した共有された社会的ノルムが1つのセットになっている場所と規定される。こうした共有された社会的ノルムはそのコミュニティではコンセンサスが得られているものであるが、他のコミュニティでは別の社会的ノルムがあるかもわからない。つまり社会的ノルムはコミュニティのいかんにより異なるものと考えられる。

他方、一人の人間 (person) は、通常1つのコミュニティだけに属すのではなく、例えば家庭や企業、地域社会のように複数のコミュニティに属している。すなわち異なったコミュニティに同時に属している。つまり同時に異なった情報フィールドのもとにある。このことは一般にUmwelt (ドイツ語で「環境」や「周りの世界」の意味する語、ここでは「ウムヴェルト」という) といわれるが、一般的には情報フィールドはこうしたウムヴェルトのもとにあると考えられる。

その一方、ガツェンダムらによると、このアプローチでは、結局、組織として問題となる中心的なものは「ビジネス」の領域であって、ビジネスの「システム分析」, 「意味論的 (semantic) 分析」, 「ノルム分析」が枢要性をもつとされる。

- ②「相互作用構造を土台とした (interaction structure based) 組織記号論」: これは、記号論のなかでも「言語行動論 (language action perspective)」に根源があるもので、言語行動のアクターが人間であるから、人的アクターが組織のエージェントとされるとともに、組織自体も1個のアクターとみなされる。情報システムは、行動能力を持った組織記号論的な人工物 (organizational sign artefacts with action capabilities) と規定される。それ故ガツェンダムらは、「こ

の情報システムについての考え方は、情報システムの純粹に代表的な考え方 (purely representational view) を超えるものであり、これでは情報システムが当該組織の1つのエージェントとして機能することができるものという考えになる」と特徴づけている。

第3の「知識志向的アプローチ」は、ニューエル (Newell, A.) やサイモン (Simon, H. A.) により代表されるものである (文献N2)。まず知識について、人間の心のなかにおける記号 (シンボルなど記号担い手を含む) の構造であるとするが、これが人間行動の根源になると規定される。このアプローチで注目されることは、知識の構造化や会話等により知識の移転や転換が起きるとして、それに着目し、感知的な (sensory) 知識の段階からコード化 (coded) された知識への進展、さらには理論的な (theoretical) 知識への発展について理論的過程を提示していることである。なおこのアプローチには、組織についての「多数アクター・シミュレーション・モデル (multi-actor simulation models)」も含まれるとされている (G2, pp.7-9)。

以上のうえにたつてガツェンダムらは、結論として、組織記号論の所説はこのようにアプローチが多様なものであるが、次の3点では共通したものとしている (G2, p.9)。

- ①記号論的伝統を研究推進の根源としていること、
- ②研究対象を組織においていること、
- ③研究の焦点 (focus) が同じところにあること。

ただし理論源泉となっているものは、主として次の2者、すなわち①パースやモリスなどの記号論と、②ハーバーマスの言語行動理論 (language action theory) であって、記号論のなかでもソーシャル、グレマス、エコー、パースなどはそれほど大きな役割を果たしているものではないと結んでいる (G2, p.9)。

ガツェンダム／リユー／ジョルナの所説は以上とする。これらスタムパー説に根拠をおく組織記号論の諸説に対して、根本的批判を提起しているものに既述で一言したピエタリネン (文献P) がある。次にその所説を取り上げる。なお次項に限り、スタムパー説的組織記号論の諸説は、一括して“組織記号論説”という。

(4) “組織記号論説” に対する批判論

ピエタリネンが自らの説の根本的立脚点としているものは、「現代組織論の理論的要諦は、組織についてプラグマティックな考え方と記号論的な考え方 (pragmatist and semiotics) をとるところにある」をいうものである。ところが、ピエタリネンによると、“組織記号論説”の現在の研究方向は、情報システムを社会的組織の記号論としてとらえようとするものであり、従ってなかならず、「組織記号論説」で最上位の概念として提示されている社会的なもの (the social) というものは、組織の (記号) 意味論的 (semantic)、かつプラグマティック論的な行き方にとっては不要なものであり、余分なもの (superfluous) である」と強く批判する (P, p.1)。

ピエタリネンは、方法論的には“組織記号論説”における考え方は、一般に社会構成論 (social

constructivism)といわれるものよりも、現象志向性が強く、本来の社会構成論には入らないものであって、“社会構成主義論 (social constructionism)”といわれるべきものである。しかも「両者は両立しない」というのである (P, p.6)。

理論の社会的役割についていえば、“組織記号論説”は、経済学でいえばネオ・クラシクな理論に代わるもの (alternative) として、あるいは、工学技術 (technology) を説明する哲学にあたるものとして登場せんとしているものであるが、ピエタリネンによると、「現在主流である考え方 (mainstream assumption) からは、基本的に離れてしまっているものであり、……これまでの伝統から背離しているものであるから、……こうしたものが無批判的に受け容れられている理由が、私にはわからない」というのである (P, p.6)。

結局、ピエタリネンが主張している立場は、記号に関与するものには人的アクターと物的アクターとがあり、組織行動は本質的に人的アクターと物的アクターとの協働 (interaction) と考えるべきであるというところにある。これはアクターネットワーク理論の立場からは当然の主張であり (文献Ω2参照)、“組織記号論説”のように、これに反し、人的アクターが上位を占めると考えるものは、根本的な誤りということになる。しかし、本節冒頭で述べたようにスタムパーでは、こうした考え方は何よりも“不快の説”として排斥されているものである。ピエタリネンは、こうしたスタムパーはじめ“組織記号論説”に反論を提起しているのである。

この点をピエタリネン自身の弁でみると、かれは「記号に関連するものは人間だけと考えるのは、誤りであり」、「それは協働 (the interactive) と社会的なもの (the social) とを混同したものである」としたうえで、「記号の意味とその展開について、状況志向的な、使用中心的なプラグマティック主義的な考え方をとるものにとっては、現実について主体中心的に考え、それを少なくとも社会的文化的にのみ構成されていると見るものなどは、否定されるべきものとなる」と宣している (P, p.10)。

このうえにおいてピエタリネンは、“組織記号論説”に対する批判を具体的に提起しているが、本稿では次の点のみを取り上げる。それは、“組織記号論説”の基礎となっているパース記号論説について、三角形的図示をすることの是非の問題である。

既述のようにパース自身は自らの説について三角形的図示をしていない。他の論者によりなされてきただけのものである。そこでピエタリネンは、まずこの点について、こうした三角形的図示は、三角形の3頂点の間にいわば独立した3つの関係があるという考え方にたつものとなるが、しかしパースのそもそもの考え方には、こうした考え方はないことを強調する。

すなわちピエタリネンによれば、もともとのパースの考えは、記号の3つの要素の間には1つの関係があるだけであって、それが3要因にいわば枝分かれする関係 (one, irreducibly triadic relation) にあるとするものである。それはパースの言葉でいえば「1つのテリデンティティ (teridentity)」といわれるものであるが、1つのものが3つの構成要素 (components) に枝分かれすることをいうものである。その場合パース説では、「オブジェクト」について対象物

である「オブジェクト」そのものと、その発信者 (utterers : 以下「アッテラー」という) とが区別されている。また「インタープレタント」では「インタープレタント」そのものと、「インタープレター」とが区別されているとする (P, p.3)。

そこでピエタリネンは、これらのことを考慮すると、結局、パース説では記号関係は図6のような二重線で示されるものであるとし、これを「二重のトライアド (double triad)」とよんでいる。これは「記号—オブジェクト—インタープレタント」と、「記号—アッテラー—インタープレター」とに分かれるが、前者は記号の物的側面を示し、後者は人的側面を示していると理解される。この意味でいえば、パース説でも人的なものとの物的なものとの協働という考えがあったとみられる。

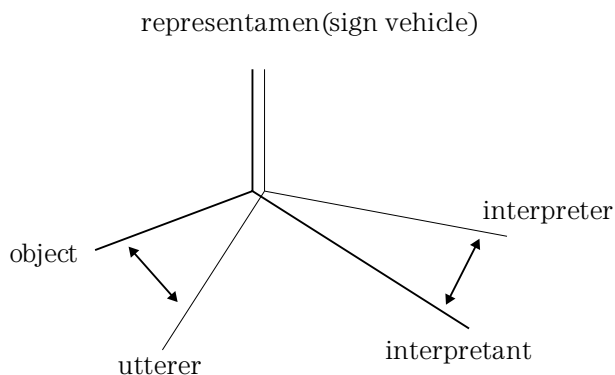


図6 : 二重のトライアド (出所 : P, p.3)

スタムパーを中心にした組織記号論については以上とする。ピエタリネンの批判に関わって、スタムパーの試みに対して本稿筆者らとしてどのように考えるかについては、別稿 (Ω10) で述べているので、それを見ていただくことにして、次に、記号論拡大の今1つの方向、「批判的記号論」の試みについて管見する。

IV. 批判的記号論の勃興

『批判的記号論』と銘うったまとまった書物には、何よりもジェノスコの2016年の著 (文献G4) があるが、ここでは、(上記で定義した)「通常の記号論」に対する個別的な批判から始めたい。これも、広くは批判的記号論の一部とされるべきものである。この点では、チャンドラーが通常の記号論に対して提起している批判 (criticisms of semiotic analysis : 文献C3) が、まず注目されるものである。その主要論点を考察する。

(1) 通常の記号論に対する批判の諸論点

チャンドラーは、まず、「記号論」という学問形態について批判を提起している。すなわち「記号論の範囲 (scope) と方法論 (methodology) には、一致した見解はほとんどない」という。記号論は「十分に整備された統一的な1つの分析的な方法や理論 (a unified, full-fledged analytical method or theory) というものではなく、その実体は単に相対的にルーズに定義された批評的な方法 (a relatively loosely defined critical practice) というべきものである」。なかんずく構造主義的記号論については、それに対する批判を進めたことにより、それを全く放棄するに到った論者もあるし、それを新しい見地に吸収させているものもある、と論じている。

そして記号論では、既述のようにどの社会科学系諸分野でもそれが基礎理論とし適用されるべきであることを求めるという主張がある。それは帝国主義的なものという見解もあるが (B5, p.107: C3, p.1), 一種の“知的テロリズム (intellectual terrorism)” といわれるものであることも指摘している (C3, p.1)。これは、チャンドラーによれば、「記号論学者が、その技法に限界があることを必ずしも明確に意識していないためであり、記号論では、それが普遍的に目的に役立つ手段 (a general-purpose tool) として無批判的に提示されている」ためである (C3, p.1)。

記号論的研究の具体的内容に関しては、チャンドラーによると、次の諸点が批判点として挙げられる。第1に、それには「主として分類化 (classification) に志向した抽象的な (内容的には不毛な) 形式論 (formalism)」に陥っているという難点があることである。そこでチャンドラーは、バックストン (Buxton, D.) に依拠し、「われわれは記号がどのように (how) (物事を構造的に) シグニファイするかだけでなく、何故 (why) そうなるか、例えば逆に、何故に構造が (事象を惹き起こす) 原因とならないことがあるかを社会的に究明しなければならない」という。

すなわち、シグニファイヤーとシグニファイドとの関係は、存在論的には確かに恣意的なものであるが、しかし社会的には恣意的なものではないという考えに立たなくてはならないのではないかというのである。チャンドラーは「われわれは、記号関係が恣意的という考え方によって、メディアの中立性という神話が促進・強化されていることを知るべきである」と述べている (C3, p.3)。いわゆる批判的記号論の原点の、重大な1つがここにあると思われる。

チャンドラーによると、この点は次の点に関連している。例えばソシユール説の場合、既述のように記号論では、究明課題に共時的変化と通時的変化とがあるが、実際には共時的変化が重視される。それは、例えば言語の使われ方で見ると、日常会話的な用法の方が筆記的用法よりも急速に変化することが注目されるためである。しかしこのことによって「とりわけ純粋な構造主義的記号論では、時間的経緯や歴史性は軽視される傾向が生まれる。この結果、記号論は、マルクス主義のような歴史重視主義からは離れた傾向のものとなる」(C3, p.4)。

これも批判的記号論生成の重大契機の1つであるが、チャンドラーによると、この点はすでに、例えばホッジ (Hodge, B.) / トリップ (Tripp, D.) により記号論的分析では所詮十全なもの (exhaustive) はできないと指摘されているものである。というのは「十全たる分析は、社会的

歴史的状況のなかでのみ可能であろう」からである (C3, p.4)。

チャンドラーの記号論批判は以上とするが、総括的にみればチャンドラーは、記号論のもととの形では社会的なものを立脚点にすることにおいて欠けているところがあるというのである。これに反応してか、近年になってリーウヴェンなどにより“社会的記号論 (social semiotics)”の試み (文献L5) が提起されている。

この点についてチャンドラーは、一方では、ソシュールも社会生活の一部として記号の役割を究明しようとしていたところがあるし、パースも記号過程を人間の対話過程としてとらえようとしていたところがあると認めながらも、他方では結論的に、「特定の意味造出過程 (special meaning making practices) の研究という形で、社会的次元に力点を置いた記号論研究が提起されたのは、比較的最近のことである」と結んでいる (C3, p.7)。

次に、ドイツのノエト (Nöth, W.) の2004年の論文「イデオロギーの記号論」 (文献N3) を取り上げる。批判的記号論では、今日では記号は、単なる意味を示すものではなく、何よりもイデオロギー表現の手段になっているという主張が、根本的柱の1つになっている。

(2) イデオロギーの記号論

ノエトは、その論文冒頭において、記号論について、“理論的 (theoretical) 記号論”、“応用的 (applied) 記号論”、および“批判的 (critical) 記号論”に分けられるとし、批判的記号論では、単にディスコースに対し批判的であるばかりではなく、記号論のディスコース (the discourse of semiotic) そのものにイデオロギー的土台 (ideological foundation) のあることが問われるものになっていると問題提起している。

まず、イデオロギーという言葉には、どのような歴史的背景があるかが考察される。ノエトによると、イデオロギーという言葉が初めて使用されたのは1796年で、フランスの哲学者、ヅ・トラシ (Antoine Louis Claude Destutt de Tracy) によってである。ヅ・トラシは、新しい経験論の立場から「観念 (ideas) の科学」を樹立しようとしたものであるが、デカルトなどの合理主義に反対し、人間は官能主義的に (sensualism) 動くものと規定し、その根源となるものをイデオロギーとよんだ。

これは、当時の啓蒙主義の一環をなすものであったが、ナポレオン帝政時代には社会的に認められないものとされた。ノエトによると、今日でも“イデオロギー”という言葉が否定的で、好ましくないもの (pejorative) とされることが多いのは、ひとつにはこうした当時の事情の故といわれる。

しかしこの言葉は、その後1つの世界観を示すものとして認められてきており、例えば有名なアメリカの社会学者、パーソンズは、イデオロギーとは「ある集団 (collectivity) のメンバーが共通で有している信念の体系 (a system of beliefs) であり、その集団の統合に対しどのような立場をとるかを示すところの、観念の体系」と定義している (cited in N3, p.12)。

他方では、マルクス／エンゲルスにみられるように、イデオロギーという言葉は否定的な意味で用いられるものとなり、一般には「支配的階級が支配を正当化し持続させるために広めている誤った観念の体系」と定義され、「イデオロギーは、人を欺くためのマニピュレーション (deceit and manipulation) の用具」と規定されるものとなってきた (N3, p.12)。

以上の2つの方向は、「価値中立的 (value-neutral) なもの」と「価値非中立的なもの」といっていいが、現代社会ではなにかんづくマスメディアにより、単なる表示的な (denotative) メッセージ (以下「ディノテーション」という) に加え、二次的な記号システムとして含蓄的な意味 (connotation : 以下「コノテーション」という) が送出されるようになっており、後者のそれは「イデオロギー」というべきものであることを指摘したのはもともと、記号論者のバース (Barthes, R. : 文献B1) であった (cited in N3, p.12)。

このうえにたつてノォエトは次のように述べている。「イデオロギー的なコノテーションは人に分からない形で行われ、批判を浴びないように隠して行われる。マスメディアで隠して行われるイデオロギー的なコノテーションは、当該社会構造が恣意的なもの (arbitrariness) であり、慣例的なもの (conventionality) であることを隠蔽するために、それらの社会構造を自然的なものであり、不可避的なものであるよう現出させることを目標としている。……イデオロギーはそれ自身の記号論的土台まで偽装するものである」 (N3, p.16)。

ただしバースは、1970年代になって、「コノテーション＝イデオロギー的なもの」、「ディノテーション＝非イデオロギー的なもの」という主張は相当性がないとして、最終的にはこれを放棄している。しかしノォエトによると、こうしたイデオロギーと、それが隠して行われるものであることは、その後においても一般的には、イデオロギーすなわち神話という形で続いている (N3, p.17)。

一方、ロッシ＝ランディ (Rossi=Landi, F.) のように、マスメディアによるメッセージのなかには、一般大衆が生活上当然のものとして安易に理解できるものと、支配的イデオロギーであるものがある。多くの場合後者では、それが容易に、かつ広く流布するよう、量的にも多くのものが流される。すなわち「支配階級は、自分たちの立場を確立するこうしたメッセージを有り余るほどの量 (redundancy) で流布している」と論じているものもある (cited in N3, p.17)。

このうえにたつて結論的にノォエトは、「論証できないような結果を提示している論者は、イデオロギー的な行為をしているものである」。ただし科学 (学問) は、イデオロギーとは異なって、土台の論証によって、「(イデオロギーと化している) コノテーションの中和化 (neutralization of the connotation) に努めるものである」と宣している (N3, p.19)。

次に、既述で一言したジェノスコの『批判的記号論』という名の2016年の著で、第1章において取り上げられているフランスの著名な論者、ガタリ (Guattari, F.) の主張を管見する。ここではガタリの所論のうち、買い物用のクレジットカードや預金出し入れ用のキャッシュカードについて、それらは十全たる意味における記号とはいえない。それらは「非シグニファイング

(a-signifying)」というべきものであるとして、その意味を解明しているところを取り上げる。ただし以下は主としてジェノスコの論述に依拠したものである (G4, p.13ff. 文献G3による)。

(3) 「非シグニファイイング」記号論

ガタリの出発点になっているのは、次の点である。すなわち、こうしたカードは、持ち主から提示され、純機械的に処理されるだけのものであるから、通常、記号といわれる言語等にあるような意味論的な内容 (semantic content) が無い。その意味ではそれらのものは「非言語的な情報交換 (non-linguistic information transfer)」の手段であり、そういう意味でガタリにより“a-signifying”なものとして提示されているものである。

ただしここで注目されるべきことは、その際ガタリがこうした「非シグニファイイング」の記号について、その意味論的内容の希薄化よりも、まず、カードの取り扱いに際し、特段の厳格さと精密さが求められることに着目していることである。つまり現代の記号には、こうしたものがあることをガタリは指摘しているのである。

これに対していえば、旧来の記号論、例えばソシュールの記号理論ではシグニファイアーとシグニファイドの関係は恣意的なものとしてされ、シグニファイドのシグニファイ性、すなわち記号のシグニフィケーション、つまり意味は、人により異なる非確定的なものとしてされ、厳格性や精密性に欠けるものとなっていた。ガタリの試みは、この点でも旧来の記号論説に対しアンチテーゼを提起するものであった。ここに少なくともこれまでの通常の記号理論に対する批判論という意味があった。

ただしこの場合、ガタリで批判・否定されているのは、厳密にはソシュール説である。これに対しパース説は積極的意義があるものとされている。例えば両者は、“記号論”としての呼称も別物とされている。すなわち、前者のソシュール説は“semiology”，後者のパース説は“semiotics”とされ、そしてガタリ説の象徴というべき“a-signifying”を含めてそれを表示する場合には、後者のパース説をよしとし、それは“a-signifying semiotics”とよぶものとされている。これに対し前者のソシュール説は“signifying semiology”である。さらに記号原理論的には、前者のソシュール説が“言語志向的 (linguistic)”なものであるのに対し、後者のパース説は“物事の二重性志向的 (dyadic)”なものと位置づけられている (G3, p.13)。

つまりガタリが“a-signifying記号論”でいわんとするところは、ソシュール説のように、(人間にかかわる)すべての物事が言語的シグニファイアーのもとに人間の言語的操作に関連してのみ説明されるというのは、今日では全く妥当性がない (grave error)。少なくとも現在では、言語的操作にはほとんど関係がないところの、機械処理だけに依存する“a-signifying”が前面にたつものになっている、というところにある。

これに対していえばこれまでは、機械操作でも言語的なものへの翻訳可能性が必須的前提とされ、いわば“言語帝国主義 (linguistic imperialism)”というべき時代であった。しかし今や機

械処理が自立し、言語への翻訳可能性は無用になった。旧来の記号論で前提となっているような記号についての人間による解釈 (interpretation) は無用になっており、記号論の革命的要変が必要になっている。この革命は、ガタリによれば、端的には「現在の記号原理を代表するものは“a-signifying”であり、その本質は機械的 (mechanic) なものにある」と表現されるものである (G3, p.15)。

この点をさらに補足してガタリは、「カードなどの記号は、今や (カードの所有者を) レプレゼンテーションする以前に、物事を動かす (work) ものである。記号と物事とは自動的に結び付いている。人間が所在する必要はない」。換言すれば「個々のエイジェントは、カードの所有者が誰であるかを問われない」(G3, p.24)。

従ってこうした全社会的な機械装置に参加するのに必要な各種カードは、(自らで動く) 分子的な存在とみることができる。これをガタリは、“分子的記号 (particle sign)”，ごく一般的には“部分的記号 (part sign)”とよんでいる。そしてこうしたフレームワークは、広く“分子的機械方法 (molecular-machinic-modality)”とよぶものとしている (G4, p.24)。

以上のようにガタリは、人間行為のカード化、すなわち記号の“a-signifying”化が、資本主義の進展とともに起きることを指摘している。ちなみに既述で一言したジェノスコによると、批判的記号論のメルクマールの1つは、記号のシグニフィケーションのとらえ方が資本主義の進展とどのように関連しているかを解明する視点にたつことであるが (G4, p.49)、ガタリの所論は、この問題に技術論的に取り組んでいるものとみることができる。少なくともそうした点に特色があるものと位置づけられうる。

これに対し、次で取り上げるフランスの哲学者・社会学者、ラザラト (Lazzarato, M) の2007年の論考 (文献L4) は、一言でいえば、記号・記号理論の進展を資本主義の生産関係論的視点から論究しようとするものである。関連する他の論者の見解も併せて管見する。

(4) 記号資本主義論

ラザラトの主張を端的に示す命題は、「資本は記号操縦者 (semiotic operator) である」、および「資本主義では記号論は“社会的従属 (social subjection)”と“機械への隷属化 (machinic enslavement)”のための用具である」というものである。後者の命題は、趣旨がかれの前掲論文の論文タイトルの一部になっているものである。この論文の冒頭で、ラザラトは「記号は、イデオロギー上の原料をはるかに超える存在であり、記号論的には資本は、財の流通や富の蓄積のためにある単なる経済的なものを超える存在である」と規定している。では、こうした点は具体的にどのように現れているのか。

ラザラトによると、その第1は次の点に、すなわち記号論は2つの2重の仕方で作用するところにある。一方では、例えばソシュール説・パース説によると、記号には“シグニフィケーション”という機能と、“レプレゼンテーション”という機能があるから、資本主義社会では

人間は、即自的には人間の主体的確立を進めるとともに、同時に対自的には組織の一環・一員としてその社会に従属したものとなる。つまり人間の主体性と従属性が進展する。

今1つは、ガタリの“a-signifying記号”にかかわるものである。これにより一方では、機械への隷属化が進むが、他方では社会経済的な物的機構 (socio-economic machine) への統合化が可能になる。

このように資本主義における記号・記号論は、ラザラトによると、さしあたりまず、「これら2つの異質の、しかも相互補完的な論理で作用するもの」と特色づけられ、それらは(タイトル的には)“シグニファイング記号システム”と“非シグニファイング記号システム”と名づけられる。

しかしこの場合、「資本にとって課題であるものは、こうした記号論的手段のコントロールである」。というのは、「資本にとって資本化されているもの (capitalized) は、どのようなものであっても、記号的力 (semiotic power) をもつものであり、これらの記号論的手段が、同時に、マネジメントと比較 (comparison)、スケジューリングとコンピューター化の手段となるためである」(L4, p.3)。つまり、記号はすべてのものについて代表する存在である。

第2に、この場合資本主義では、記号論上の課題や解決案にかかわる選定とイニシヤティブは、統治者と被統治者の間でいわば先天的に決められた形で行われるのが原則である。新聞などマスメディア等のディスコース的なものでは、問題の取り上げ方や前提について、さもコンセンサスがあるかのように展開されるが、しかし「それらは、全く当該マスメディア関係者だけで作成されるもので、その当否が一般に問われることはない」(L4, p.4)。

つまり、「問題となるもの、およびその意味は、すべて当該の支配的現実 (the dominant reality) のそれである。そしてシグニファイング記号論のコミュニケーション機構は、こうした明白な事実を生み出すところでのみ有効とされるものである」(L4, p.4)。

ラザラトの記号資本主義論の特徴的要点は以上とし、次に、同じく記号資本主義の本質について真正面から論じているイタリアのベラルディ (Berardi, F.) とアメリカのジャックメット (Jacquemet, M.) の2011年の連名論文 (文献B4) を考察する。

ベラルディ/ジャックメットは、19世紀的資本主義が主として鉄鋼の製品生産をスローガンに、地域性 (territorialized) を基盤に進展したのに対し、今日の資本主義すなわち記号資本主義は“ポスト工業化生産”がスローガンであるが、ただし“技術言語的な (technolinguistic devices) 製品生産”をモットーとし、旧来のような場所的拘束性はない“記号的生産 (semiotic production)”を行っているところに何よりも特色があると提議している。

その所説では、その場合記号はなかならず(広義の)言語に代表されるものとされているところに特徴がある。ベラルディ/ジャックメットは、19世紀型の「労働時間と価値との数量的関係は崩壊している。近年の規制緩和で社会的負担も軽減し、そして言語(記号)が生産活動の全般的指標になるとともに、資本による(社会的な)強奪的な (predatory) 行為が通常のもの

となった。……(例えば) 1つのアイデアの創出・生産に必要な社会的必要労働時間はどれほどのものか、決めるのは不可能である」とし (B4, p.2), 一言でいえば今日の社会体制は、「記号資本主義生産様式 (semiocapitalist mode of production)」とよぶべきものとしている (B4, p.3)。

「記号資本主義生産様式」の特徴についてベラルディは、2008年の単独著書 (文献B3) で要旨次のように書いている。そこでは「資本は抽象的な概念ではなく、記号操縦者である」。すなわち、労働過程は場所的拘束性がない個別性の強いものとなるが、資本の側では、記号の即時的作用を可能にするテクノロジーと、価値法則とにより、生産過程の安定的統合を可能にするものである (cited in G4, p.104)。

ベラルディ/ジャックメットの所論は以上とし、次に、これらの所論に関連し、批判的記号論の現時点におけるいわば総括にあたっているジェノスコが、この問題についてどのように論じているかを管見する。

ジェノスコは、今や資本主義は (19世紀のような) 昔の型で問題となるのではない。そこでは、例えば価値は平均的労働量として、いわば量的に問題となるものであったが、今日では、例えば剰余価値が (旧来のように) “工業現場型 (industrial sense) 労働” のみから生まれるという考えは通じない。今日の資本主義は精神的 (immaterial) 労働のあり方がキーポイントとなる主体従属化 (subjectivation) の機構となっており、“人間を内部から (from inside) とらえる” ところの、“社会的なものすべて (all of the social)” が生産過程・経済過程に取り込まれているものである、という。

ラザラトはこれを (本項冒頭で紹介しているように) 「資本が記号操縦者になっている」と特徴づけているが、ジェノスコはこれを、「資本主義は今やこうしたプロセスのものに、すなわちすべてが記号論システムとなっているというべきものに、なっている」と表現している (G4, p.103)。この場合ジェノスコによると、何よりも注目されるべきことは、こうした“記号論化 (semiotization)” が事業機構の資本化 (capitalization) に役立っていることである。ただし「こうした社会化された力関係は資本によって搾取されたものであり」、かつ「記号論が (資本という) 権力と直接的にかかわるものとなっている」ことを認識するのが肝要と力説している (G4, p.104)。

さらにこの場合注目されるべきことは、ジェノスコが、こうした考え方の基本にはマルクスのそれと軌を一にするものであることを随所で指摘していることである (例えばG4, pp.67-68, 104-105, 112)。ただし例えば「マルクスでは、固定資本に関して一般知識労働 (general intellect) のハード化・物質化 (hard materialization) の分析に力点があったが、こうしたことは、記号資本主義論では再考が必要」としている (G4, p.105)。

ともあれ、記号資本主義論としてさしあたり強調されることは、現代資本主義経済において“知識労働化”などが進んでいるが、それは一言でいえば、本項冒頭で紹介したラザラト論文の基本命題にあるように、内容的には、記号による「機械への隷属化」と「社会的従属」の進

展に尽きるということである。

なお、広くは批判的記号論の一環として、フェミニズム進展の立場から記号論研究の有用性を論じているものもある。例えば夫婦の姓について、欧米では夫婦旧姓の並列表記のものが結構あるが (ampersand problem)、こうしたものは、記号論的にも姓 (広くは言葉) の上における旧来の男性本位制の変革に大いに有用と論じられている (文献G5)。

V. おわりに—記号論の位置づけのために

本稿では、以上のように、「組織記号論」と「批判的記号論」という形における記号論の拡大について考察を行ってきたが、それらは、拡大の方向としては相反するものである。しかしこのことは記号論には拡大・拡張の方向がいくつかありうることを示している。これは、換言すれば、記号論帝国主義として批判的になってきたものであるが、翻って考えると、これは、記号論には、社会科学諸分野を1つの統一的原理で説明する方途を開く可能性があることを示している。

この点からみると、記号論説のなかでも、ソシュール、パース、グレマスに代表される、ここで通常の記号論というものでは、外部から内部に考察をするものとされ (L3, p.252)、その場合の方法に限定されてきたきらいがある。そういう意味では、それぞれの分野の内部の解明にまでは至らず、方法の提示、すなわち方法論に留まってきたものといわざるを得ない。

これに対し、本稿で考察した「組織記号論」と「批判的記号論」では、それぞれの形においてこれまでの限界を超え、なんらかの形で当該分野の内部の解明に努めるようにする傾向が大きいと思われる。例えば「批判的記号論」では、“記号資本主義論”を中軸にして現代資本主義分析について新しい地平を開こうとする傾向をみることができる。

こうした諸点からみると、記号論は、「経済学」や「経営学」、「社会学」などと並ぶ1つの“ディシプリン (個別学問)”として考えるよりも、社会諸科学全体を統一原理で解明する1つの学問として、例えば「社会科学論」といった名称のものとして位置づけるのが相当と考えられる。

それは、記号を中核的統一原理として社会科学全領域をカバーするものであるが、例えばインターディシプリナリやマルチディシプリナリとして提起されながらも、これまで有効性が認められてこなかったところの、社会科学諸個別科学の相互共同研究にとって1つの方法となりうるものと思われる。こうした複数個別学問の共同研究形態として、現在、例えば“ポストディシプリナリ論”や“トランスディシプリナリ論”が唱えられているが (Q1, 8)、その実質的土台をなすものとして“記号”は有用でないかと思料する。

〔参考文献〕

- B1: Bathes, R. (1964), Rhétorique de l'image, *Communications*, vol.4, pp.40-51.

- B2:** Beebe, B. (2004), The semiotic analysis of trademark law, *UCLA Law Review*, no.621,pp.621-665.
- B3:** Berardi, F. (2008), *Félix Guattari: Thought, friendship, and visionary cartography*, (trans. by G. Mecchia & C. Stivale), London: Palgrave Macmillan.
- B4:** Berardi, F. and Jacquemet, M. (2011), The Italian anomaly: Berlusconi and semiocapitalism, *The Populist Imagination*, January 17, 2011, pp.1-8.
- B5:** Berger, A. A. (2011). Tourism as a postmodern semiotic activity. *Semiotica*. Issue 183: pp.105-109.
- C1:** Chandler, D. (last modified October 22, 2014), Semiotics for beginners: Introduction, pp.1-30, retrieved December 20, 2014, from: <http://visual-memory.co.uk/daniel/Documents/S4B/semiotics0.2.html>
- C2:** Chandler, D. (last modified October 22, 2014), Semiotics for beginners: Paradigmatic analysis. 1-15. Retrieved October 22, 2014, from: <http://visual-memory.co.uk/daniel/Documents/S4B/semiotics0.5.html>
- C3:** Chandler, D. (last modified July 5, 2017), Semiotics for beginners: Criticisms of semiotic analysis, pp.1-7, retrieved November 7, 2014, from: <http://visual-memory.co.uk/daniel/Documents/S4B/sem11.html>
- C4:** Corso, J. J. (2014), What does Geimas's semiotic square really do? *Mosaic (Winnipeg)*, vol.47, pp. 69-89.
- C5:** Costello, G. (2016), Communication using signs: An empirical study of a manufacturing information system using Stamper's OS ladder, *AIS SIGPRAG: Pre-ICIS Workshop 2016 "Practice-based Design and Innovation of Digital Artifacts"*, pp.1-19.
- F1:** Felluga, D. (2002). *Modules on Jameson: I: on ideology*, retrieved 2015, May 14, from: <https://www.cla.purdue.edu/english/theory/marxism/modules/jamesonideology.html>
- F2:** Filipe, J. and Liu, K., The EDA model: An organizational semiotics perspective to norm-based agent design, retrieved 2017, October 20, from: <http://citeseex.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.87.6261&rep=rep/&t>
- G1:** Gazendam, H. W. M. and Liu, K. (2003), The evolution of organizational semiotics: A brief review of the contribution of Ronald Stamper, retrieved 2017, October 20, from: www.orgsem/papers/00.pdf
- G2:** Gazendam, H. W. M., Jorna R. J. and Liu, K. (2004), Organizational semiotics, round table workshop 'An organizational semiotics view on interculturality and globalization' at the IASS 2004 Conference, pp.1-11.
- G3:** Genosko, G. (2008), A-signifying semiotics, *The Public Journal of Semiotics*, vol.11, pp.11-21.
- G4:** Genosko, G. (2016), *Critical semiotics: Theory, from information to affect*, London: Bloomsbury.
- G5:** Godard, B. (2003), Feminism and semiotics, *The Semiotics Review of Books*, vol.13-2, pp.1-5.
- G6:** Guinard, P. (1993), Critical analysis of Peirce's semiotics and an ontological justification of the concept of the impressional, (trans. by M. Becvarov), retrieved 2017, October 20, from: <http://free.fr/16peiren.html>
- H:** Hébert, L. (2011), *Tools for text and image analysis: An introduction to applied semiotics; version 3: 2011, (translated), 1-201*, retrieved 2014, October 22, from: <http://www.signosemio.com/documents/Louis-Hebert-Tools-for Texts- and Images.pdf>
- I:** IFIP Foreword (2002), The International Federation for Information Processing, in: Liu, K., Clarkle R. J., Andersen, P. B., Stamper, R. and About-Zeid, E. (eds.) (2002), *Organizational semiotics: Evolving a science of information systems*, Kluwer Academic Publishers.
- K1:** Kim, J. (1993), From commodity production to sign production: A triple triangle model for Marx's semiotics and Peirce's economics, *Paper presented at the Annual Convention of SCA —Miami*. pp.1-34.
- K2:** Kockelman, P. (2006), A semiotic ontology of the commodity, *Journal of Linguistic Anthropology*,

- vol.16, pp.76-102.
- L1: Latour, B. (2005), *Reassembling the social: An introduction into actor-network-theory*, Oxford University Press.
- L2: Law, J. (2007), Actor network theory and material semiotics, retrieved 2017, October 20, from: [www:heterogeneities.net/publications/Law2007ANTandMaterialSemiotics.pdf](http://www.heterogeneities.net/publications/Law2007ANTandMaterialSemiotics.pdf)
- L3: Lawes, R. (2002), Demystifying semiotics: Some key questions answered, *International Journal of Market Research*, vol.44, pp. 251-264.
- L4: Lazzarato, M. (2014), *Signs and machines: Capitalism and the production of subjectivity*, (trans.by Jorda, J. D.), Los Angeles: Semiotext.
- L5: van Leeuwen, T. (2005), *Introducing social semiotics*, New York: Routledge.
- M1: MacCannell, D. (1999), *The tourist: A new theory of leisure class*, Berkeley: University of California Press. (安村克己/須藤廣/高橋雄一郎/堀野正人/遠藤英樹/寺岡伸悟訳『ザ・ツーリスト—高度近代社会の構造分析』学文社)
- M2: Martin, B. and Ringham, F. (eds.) (2000), *Dictionary of semiotics*, London: Cassell.
- M3: Mingers, J. and Willcocks, L. (2014), Developing an integrative semiotic framework for information systems: The social, personal and material worlds, *Information and Organization*, vol.24, pp.1-44.
- N1: Nake, F. (2002), Data, information, and knowledge: A semiotic view of phenomena of organization, in: Liu, K., Clarkle, R. J., Andersen, P. B., Stamper, R. and About-Zeid, E. (eds.) (2002), *Organizational semiotics: Evolving a science of information systems*, Kluwer Academic Publishers, pp.41-50.
- N2: Newell, A. and Simon, H. A. (1976), Computer science as empirical inquiry: Symbols and search, *Communications of the ACM*, vol.19, pp.113-126.
- N3: Nöth, W. (2004), Semiotics of ideology, *Semiotica*, vol.148, pp.11-21.
- O: Ogden, C. K. and Richards, I. A. (1923/ 1989), *The meaning of meaning*, San Diego: Harcourt Brace Jovanovich.
- P: Pietarinen, A., On the conceptual underpinnings of organizational semiotics from the pragmatist point of view, retrieved 2017, October 20, from: [www.Helsinki.fi/Pietarinen%20.%20On%20the%20Conoptual%](http://www.Helsinki.fi/Pietarinen%20.%20On%20the%20Conoptual%20)
- S1: Sastre, R. (2016), An methodology for management research: Insights from semiotics, *Studia Oeconomica Posnaniensia*, vol.4, pp.200-218.
- S2: Stamper, R. (2002), Preface : Organizational semiotics: Evolving a science of information systems, in: Liu, K., Clarkle R. J., Andersen, P. B., Stamper, R. and About-Zeid, E. (eds.) (2002), *Organizational semiotics: Evolving a science of information systems*, Kluwer Academic Publishers, pp. xv-xxiv.
- S3: Stamper, R. A semiotic theory of information and information systems, rapporteur: John Dobson, retrieved 2017, October 20, from: <https://assets.cs.ncl.ac.uk/seminaris/101.pdf>
- S4: Stamper, R., Liu, K., Hafkamp, M. and Ades, Y. (2000), Understanding the roles of signs and norms in organization, *Journal of Behaviour & Technology*, vol.19, pp.1-19.
- W: Wesolko, D. (2016), The theory of affordances, retrieved 2017, October 20, from: www://medium.com/@dane:vesolko/the-theory-of-affordances-cb51fd138b3e
- Ω1: 大橋昭一 (2012) 「ポストディシプリナリ論の進展過程—ツーリズム論 (観光学) の方法論確立を視点において」『和歌山大学・経済理論』369号, 31-51頁
- Ω2: 大橋昭一 (2015a) 「アクターネットワーク理論の進展過程—物質主義志向的アクターネットワーク理論を中心に」『和歌山大学・経済理論』379号, 41-62頁
- Ω3: 大橋昭一 (2015b) 「経済理論の記号論的展開過程—構造主義的 (伝統的) な記号論を中心に」『和歌山大学・経済理論』381号, 83-102頁
- Ω4: 大橋昭一 (2015c) 「ブランド理論の記号論的展開過程—近年における記号論立脚的ブランド理論の特色」

『関西大学・商学論集』60巻2号, 59-79頁.

- Ω5: 大橋昭一 (2015d) 「記号論的転回の進展過程—記号論立脚のトランスモダン論の提起を目指して」『和歌山大学・経済理論』382号, 83-96頁
- Ω6: 大橋昭一 (2015e) 「商業・マーケティング領域についての記号論的分析の形成過程—その特色はどこにあるか」『関西大学・商学論集』60巻3号, 81-99頁
- Ω7: 大橋昭一 (2016a) 「ツーリズムの記号論的展開過程—わが国における観光概念の規定の前進のために」『和歌山大学・観光学』14号, 13-22頁
- Ω8: 大橋昭一 (2016b) 「トランスディシプリナリティ論の進展過程—ツーリズム論(観光学)の」方法論的確立の観点から」『和歌山大学・観光学』15号, 15-22頁
- Ω9: 大橋昭一 (2017) 「記号論に立脚したツーリズム研究の特性について—ツーリズム研究の一層の発展のために」『観光学評論』5巻2号, 165-180頁
- Ω10: 大橋昭一／竹林浩志 (2018) 「組織の新しいとらえ方—組織記号論をめぐる諸論調」『和歌山大学・経済理論』392号 (印刷中)